

## 「根津美術館の国宝・重要文化財」展

根津美術館（東京・港区） 2020.11.14～12.20

「根津美術館」は、鉄道王と言われた初代「根津喜一郎氏」が没後、二代目が財団を設立 1941 年に美術館が開館、本年は設立 80 周年を記念して同館が所蔵する「国宝 7 点」「重要文化財 88 点」全てを披露する豪華な催事である。尾形光琳《燕子花（かきつばた）図屏風》（左隻） 18 世紀 紙本金地着色



作品は、其一画伯の夏の暑さを一瞬に忘れさせてくれるような傑作で、鮮烈なる色彩対比は色感そして形態感覚が極めて明晰で、江戸時代

のみならず日本の絵画史全体を代表する名作品で「国宝」に指定されている。

総金地の六曲一双屏風に、燕子花の群がりを上からの視点で、濃淡の群青と緑青の 2 色によって鮮烈に描き出され、花の色目が濃くて左右隻の対照も計算され、リズムカルに配置され一部に型紙が反復して利用されるなど、一見、意匠性が際立つが顔料特性を生かした花卉のふっくらとした表現は見事である。

鈴木其一《夏秋溪流屏風》（左隻） 19 世紀（江戸時代後期）紙本金地着色六曲一双



其一は江戸琳派の祖「酒井抱一」に学んだ画家で、宗達、光琳、抱一と継承された琳派の造形を個性的な感覚によって近代につなぎ、琳派風の範疇にはおさま

らない作品を発表するようになった。本作品は、溪流が流れる檜の林に桜の葉が赤く染まる秋の情景で、発色のよい群青と金泥で描かれた溪流のねっとりとした表現、百合や桜の葉の克明な描写に対して、熊笹、増殖するような苔など一見写実的な描写に非現実的な感覚がにじみ出ている。 「重用文化財」